

協会関連文献

子ども風土記

沖 縄 の 巻

仲 地 吉 雄

日本には昔から「可愛い子には旅をさせろ」とか、「子どもは風の子、などと言って突き放した育て方、屋外での鍛練を強調した思考はあったが、現実の育児に関する一般的対応はこれとは裏腹で家庭における育児学の足跡を辿ってみても、つい最近までは、アメリカでは乳幼児期に最大の不自由があり、思春期に最大の自由があるといわれたのに対して、日本では逆に、乳幼児期に最大の自由があり、思春期に最大の不自由がある」と対比されてきたものである。

乳幼児期のわがままや、甘えに対して人々は最大限に寛容で総ての自由が与えられ、思春期になると、夜間外出の門限云々と、他律的に規制してきたパターンが日本のそれであり、一方欧米では幼児期に、日常の生活を通して自立やきびしい躰けの精神をたたきこみ、思春期以後は1個の人格として尊重していくという彼我の極めて対照的な対応は、その底流にある物の考え方、将来の人格形成の基本にかかわる問題として、その得失を含め、この辺りで小児科領域からの問題提起と処方箋が示されればと考えるが如何なものであろうか。

戦前の沖縄は「イモとハダシ」で象徴される様に日本一の貧乏県として地味低く、水乏しく風波におびやかされる不毛の環境の中で人々は永い歴史の試練に耐えてきたが、「貧乏人の子沢山」とはよく言ったもので、どの家庭も比較的多産の傾向にあり、適正人口をコントロールするための所謂間引きの慣習は古くから無かった様で、養うに足る限界を超えた部分は遠く海外（南洋群島、ハワイ、ブラジル、ペルー等）へ

日本小児保健研究
第38巻 第2号 1979

の移住にその活路を開いているのが昭和の初期までの沖縄の歩んできた道中である。日本でいち早く海外移住の先鞭をつけ、又最も多く海外へ移住者を送り出している県であろう。「移植に耐える者は成功する」の譬があるが、どうやら既に移住先でも、二世、三世の時代になり十分移植にたえて根づいているというのが最近の情報である。

僻地や離島県としての昔の沖縄の習俗を内から眺め語られる伝承は数多くあるがその一部は今日も尚生き続けて人々の生活に溶け込んでいる。

弱い無力な人間同志が肩を寄せ合い極限の中で生きて行くための知恵は、ある時は生活を脅す諸々の出来事に、ある解釈をつけて安心を得、更にはもっと積極的に、自らに幸をもたらす力さえ幻想したもののようなものである。

地理的、歴史的、文化的に孤立した小さな独立圏に生きて来た人々は、その生活の中で突如としておこる不可思議な現象に、どのような意味づけをし、どのような力を生み出すことによって将来への期待をつないでいったか、数々の伝承や通年の祭事に人々の素朴な神への祈り、希いがこめられているようで今日回顧しても、自然を畏怖する人々の敬けんさにある種の感慨を憶える。

以下若干の伝承や記録を頼りに、今はもう昔物語りになったありし日の沖縄40余の島々の習俗のプロフィールの一面を子供のそれを中心に若干摘記してみたい。

出産、育児：施設分娩や免許制による助産婦

の分娩介助が普及したのは1950年代頃からで、それまでは助産婦さえいない離島や僻地では、シマサンバ（島産婆）といって経験のある村の老婦が分娩を介助しており、臥産が普通で、難産の時は座産の姿勢をとらせ、天井から縄をつるしてそれを握ってりませたという。当時の医療、助産技術では死産、周産期死亡、あるいは産褥産熱等による産婦の死亡も少なかったと思われる。産室は一家の裏座にとり、地炉（囲炉裏）を急造して産後一週間は終日薪をくべて産婦は暖をとり、体を温め回復をはかったといわれているが、夏の暑い最中などはさぞ難行、苦行であったろうと想像される。産後一週目で産婦は産褥生活を切り上げて産室を出ている。

記録によればウブ・ジーといって初乳の出るのは早い人で産後3日頃からのようでそれまでは氷砂糖をぬるま湯でとかし綿にひたして吸わせていたようである。乳母からの貰い乳の慣習広く定着しているが、この点は他の地域と異なることはないであろう。産婦には乳がよく出るようにと鯉節や赤肉を煎じたスープを飲み、赤ん坊には腸のめぐりをよくするのだといって肝臓（豚）を煎じた汁を飲ませる習俗も一部の地域にはあった様である。

未熟児等低出生体重児の哺育がどのように行われたか詳かではなくおそらく高い死亡率を示したことと思われるが、唯一の救いは温暖な気象条件は、或いはそれ自体自然の大きなIncubatorの役割をある程度果たしたのではないかと思われ、茅屋の隙間風はVentilatorとして外界からのO₂の補給に或いは一役を演じたのではと勝手な想像をめぐらせているが、勿論素人のそれで根拠のあるものではない。

出生の届出、命名：①生後7～9日あたりで赤ん坊は命名される。古くは命名の1つのしきたりがあって、地区によって多少の違いはあるが、男児が生まれた場合弓で箕を射、女児の場合は農具の籠でシブ草（力草）を掘りおこすしぐさが

儀礼としてみられている。又生児の着物の上に蟹をはわせる習俗も広く分布していたという。

（カニのように元気よくかけめぐれの謂いであろう）周産期或は新生児期の死亡は役所へ届出なくてもよいとお互いに納得していたようである。

戦前、総理府統計局の資料では、沖縄県は日本一死亡率の低い県となっているが、これはおそらく叙上の出生届出制の不備による統計処理上の問題で、真実は反映してまい。因に大正、昭和の初期まで沖縄では乳児期前半と後半では死亡率に差違がでていないのである。

②ソグ：或る離島の記録ではソグという行事が毎年8月13日に行われている。それは前年の8月14日以降に生まれた子供の戸籍なおしである。役場から戸籍係が来て公民館でこの1年間に生れた子供の名前を記載した。随分とおうような戸籍処理の様にも思われるが一方乳児死亡率の高かった当時としては、1年単位でチェックして、その間に脱落したものはなるべく戸籍をよごしたくないという配慮から記録に多少の手加減を加えた事も想像される。その日は部落をあげて戸籍係への料理のもてなしが行われている。

子どもの病気：湿疹やオデキのできやすい子はタイドクがあるといって通称カッテイ（勝手の知った人）に依頼してカミソリで瀉血する風習が広く行われた。子供や成人が高熱を出しても、医師に診て貰う経済的余裕はなく、まず売薬と瀉血の二本立てが常用されている。鋭利なカミソリで迅速、頻回に皮膚をScratchして血を出す沖縄独特の風習と思われるが、瀉血の部位は大いこめかみや、両側肩胛骨間部、或は頭頂部等の皮膚である。

狭い地域ながら成人の梅毒の流布も案外多かった様で、俗にフルチといい、更に皮膚外表に顕著な症状の出たものを南蛮ガサと言って嫌悪された。今日では前記瀉血の風習も全島からす

っかり影をひそめ、先天梅毒児も第一線の臨床でみる機会はこの10年来殆ど無くなってきている。

幼児葬法：7歳以下とか、4歳以下というように地域によってまちまちであるが一般に幼児の死亡の際は普通の葬式の形式をとらず親（父又は母）が抱いて墓地に行き、そこで小箱（ソーマン箱等）に入れ、ワラビバカ（童墓）に葬り、本墓へはある期間がたち、本墓があく時に洗骨して入れたという。周産期、乳児の死亡は墓庭に埋めて、位牌もつくりず供養もしない。子が親より先に死ぬことは親に対する大きな不幸だという古い中国の思想の影響があったように思われる。

結語：歴史をふり返ると自然の脅威に対する人々の敬けんな受身の立場から漸次アクティブ

地方だより

沖縄県小児保健協会だより

理事 稲 福 盛 輝

沖縄県小児保健協会は、昭和48年に設立され、今年で5年目を迎えた。会員も小児科医、産婦人科医、保健婦、助産婦、看護婦、保母、栄養士、その他広範囲の職種の会員から構成され、会員も約300名に及んでいる。協会事業も年々軌道に乗り毎年定期総会及び学会の開催、毎月の乳児健診の実施、協会機関誌発刊等は県民からも高く評価されている。

昭和53年4月15日に那覇市自治会館に於て第6回総会並びに学会が開催されたが、8題の一般講演、5年目の記念として日本小児保健協会々長の村上勝美先生をお迎えして「小児保健、ことに幼児期の諸問題」について、特別講演を拝聴することが出来、会員に今後の沖縄県小児保健協会の進むべき方向に大きな指針を与えて下

な姿勢への転換が時の流れと共に感じられる。文明が発達し、生活が便利になり、孤島苦もすっかり解消され、往年の貧乏県も今では却って肥満児対策や高脂血症を心配しなければならない状況で、学童の体位も本土のそれに殆んど遜色ないまでに加速してきた。周辺の急激な社会の変貌が現在に生きる子どもたちにとって果して本當により心の豊かな、より幸せな方向へ向っているのかどうか。

これから先、物の豊かさと心の貧しさが逆相関しないように祈りたいし、それが又浅学な筆者の杞憂であれば幸いである。

擲筆するに当り参考文献を配慮して下さった渡口真清博士、稲福盛輝学士に深甚の謝意を表します。

日本小児保健研究
VOL. 38 No 4 1979

され、会員一同深く感銘し有意義な学会であった。

本協会の発展には役員並びに会員の協力は勿論であるが、日本小児保健協会、各保健所、各医療機関、各市町村のご支援のおかげである。尚、毎年学会で特別講演をなされて下さった船川幡夫、平山宗宏、山内逸郎、高橋種昭、大場義夫の諸先生方の指導に対し深く感謝致します。

次に、当協会の実施している乳児健診も地域住民の関心が年々高まり健診率も上昇する一方で、昭和48年から昭和52年の5カ年間の延健診数が71,412名に達し、そのうち3,148名の要精密検査の対象者が発見され、適切な指導が行われた。

乳児健診で特筆すべきことは、協会の悩みである離島健診である。宮古島、八重山島については、平山宗宏先生を団長とした健診団が毎年多数の健診班を動員して献身的なご活躍に住民からも非常に感謝されており、厚くお礼を申し上げるとともに、今後もご協力をお願いする次第である。

本協会も5年目を迎えた機会に、今後の事業を一層充実させるように、いろいろの検討がすすめられているが、主な点は次の通りである。

~~~~~  
地方だより  
~~~~~

1. 従来の乳児健診をもっと充実なる健診方法を検討する。
2. 全離島の乳児に対する健診を実施する。
3. 住民への育児教育及び相談の方法をすすめる。
4. 会員相互間の教育を実施する。

以上の事業項目においてすでに実施している項目もあり、今後各方面のご協力とご指導を切にお願いします。

日本小児保健研究
第35巻 第3号 1976

沖縄県小児保健協会だより

理事 仲里幸子

沖縄が47番目の県として本土へ復帰し、まだ整理がつかない1年後の、昭和48年7月28日に沖縄県小児保健協会が誕生した。誕生までには、数多くの方達の協力があったが、特に稲福盛輝先生（開業）や知念正雄先生（県立中部病院）や、当時の県小児科医会長の山本達人先生（開業）が幹事役を引き受け、数回にわたり発起人会を開き準備をすすめた。そのかげには、船川幡夫先生の御指導が大きき力となっていた。発会式における幹事役の知念正雄先生は、当月の挨拶の中で、「これまでの経過を通して、私達は小児保健の必要性をあらためて確認すると共に、沖縄における小児保健の実態を把握するためには小児科医だけでなく、県厚生部をはじめ、保健婦、助産婦、看護婦、産婦人科医、養護教諭、保母、栄養士など多方面からの御参加がなければ出来ないということを強調して参りました。そして各方面が、それぞれの立場から、その地域のニーズにそって沖縄の小児保健に関するテーマについて調査研究を進めていき、年2回の研究発表会を行うと共に、ひいては沖縄の医療

行政レベルまでのせる様に働きかけて行こうということになりました。」とのべている。

初代会長は仲地吉雄先生（開業）が選出され、きめこまかな計画のもとに協会は動き出し、2代及び3代の稲福盛輝会長は、前会長の後を引きつぎ、協会を軌道にのせ、去る4月に4代の会長に選出された佐久本政彦先生（開業）は、協会の発展にともなう事業の諸問題解決に取り組んでいる。協会には、各専門団体からの代表が理事として選出され、理事会を構成し、更に理事の中より常任理事が設けられ、企画、庶務、会計、広報と各々担当があり、縁の下の力持ちの役割を果している。又、初代会長より3代目の会長の補佐を果してきた竹中静広先生は、県母性保健協会の会長で、小児保健と母性保健は表裏一体、不即不離の立場にあるという点から副会長の役を務めてきたが、今年度は、協会事業と関連して、県保健所長会長の原実先生が副会長として、協会の円滑な運営に活躍している。会員は、発会時 209名で、今年度は 203名となっているが、その半数の 107名は保健婦で、次

いで医師、看護婦、教師、助産婦、栄養士、保母、一般となっている。

協会活動をみると、年1回学会を総会に引きつぎ行っているが、48年度5題、49年度9題、50年度9題であったのが、51年度は演題も多く、時間の都合等もあり14題にするなど、企画委員にとっては、嬉しい悲鳴であった。年間の小児保健に関する調査研究の中より13題を選考し、1題につき5万円の研究奨励金を出し、会員の研究意欲を高めている。これまで研究奨励金をもらったものは、医師、保健婦、看護婦、養護教諭、栄養士等各方面にわたり、年々その範囲が拡大されてきつつある事は、将来がたのもしい。特別講演も、第1回学会の船川幡夫先生の「生活環境の変化における小児保健について」をはじめとし、平山宗広先生の「乳幼児健診の実際と方向」山内逸郎先生の「新生児の母乳栄養」高橋種昭先生の「母と子の精神衛生」等が行なわれ、教育講演として、島田信宏先生の「新生児の見方」平山宗宏先生の「予防接種の実際と問題点」等が行なわれ会員の資質向上が図られている。広報活動としては、年1回平和と健康ですこやかに育つようにとの願いを示したシンボルマークのついた「沖縄の小児保健」を発

行すると共に、会員に必要な資料の印刷配布を行っているが50年度は、地元二大新聞の沖縄タイムスに「赤ちゃんの健康」について会員が分担執筆し、32回連載され、一般住民の関心を高め好評であった。年間活動の中で、最も地域住民に貢献しているのは、土・日曜日の休日を利用した乳児一般健康診査である。協会は、保健所や市町村の協力のもとに、小児科医、保健婦、看護婦、臨床検査技師、市町村職員のチームにより実施しているが、48年度健診数 5,786人に対し、要精査 322人、49年度健診数14,582人に対し、要精査 538人50年度健診数15,090人に対し、要精査 709人と、心身障害児の早期発見に努め、台風等のない限り、土・日曜日は市町村のどこかで会員がボランティア精神を発揮して、健診に参加している姿が見受けられる。

48年の夏に発足した協会も、まだ3歳児の域に達しないが、会員一同が職種を問わず協会の一員だという意識のもとに結集し、たゆまない努力をしながら活動している為、今日まで歩む事が出来たと思う。特に、会長をはじめ、企画や庶務会計及び広報担当の理事達が、日常の業務の多忙にもかかわらず、積極的に活動を推進してきた事が、大きな源動力となった。

ユニークな地域活動

総合乳幼児研究Ⅱ号
Summer 1977

沖縄の小児保健活動

—沖縄県小児保健協会の活動を中心に—

小 渡 有 明

沖縄県は、わが国の最西南端、東西約 1,000 kmの広大な海域に散在する60余の島々からなっている。沖縄振興開発特別措置法による指定離島は57（うち39の島に住民が居住）で、県全体のおよそ45%の広さを占めているが、離島は年々過疎化が進み、人口は全县の15%にすぎない。その反面、沖縄本島の都市地区に人口の集中化がみ

られる。

本県の母子衛生の状況をみると、出生率は昭和35年以降、ほとんど横ばい状態にあり、昭和50年の出生率は21.5%で全国平均17.1%より高く、全国の第1位である。

乳児死亡率は、12.1%と全国でも高い方に位置し、妊産婦死亡率も5.1(出生万対)と高い。

また、低出生体重児の出生頻度は、7.8%で全国第1位であり、乳児死亡の原因のおもなものは、先天異常、肺炎、未熟児などである。

医療施設は、年々増加し、特に本土復帰の昭和47年以後の増加は大きい。全国平均にはまだまだ及ばず、一般病院で $\frac{1}{2}$ 、一般診療所で $\frac{1}{2}$ というのが現状である。

医師の数も過去7年間で174名、年平均25名の増加を示しているが、まだ全国平均の51%にしか達していない。昭和50年末現在の医師の数は621名で、うち、小児科を標ぼうしている医師は53名で、全医師数の8.5%にあたり、しかもその大半は那覇市を中心とする都市地区に集中しており、小児科医のいない地域が多い。このことは、沖縄県の小児保健活動に多少なりともひずみが生ぜざるを得ない。このような状況のなかで、沖縄の小児保健を考えようという主旨のもとに、沖縄県小児保健協会が、本土復帰の翌年、昭和48年7月に発足し、無小児科医地区の小児保健もカバーすることになった。

以下、沖縄県小児保健活動をカバーすることになった。

しく紹介してみたいと思う。

当協会は、小児科をはじめ、保健婦、助産婦、看護婦、栄養士、保母など小児保健に関心をもつ人達で構成され、現在会員数は200余名である。当協会も今年で4年になるが、年1回の総会並びに学術集会には会員の日頃の研究成果の発表があり、特別講演の講師も小児保健に関係の深い方々を広く県外からお招きして、会員の研修の場にふさわしい集会にしている。発足以来、年1回発行している協会誌「沖縄の小児保健」は、学術集会で発表された会員の研究レポートを中心に編集されているが、将来、小児保健の地方学会誌として発展していくことを願って、担当理事を中心に努力が重ねられている。

当協会が発足してから、大きな事業として行っている活動に乳児一般健康診査がある。この

事業は、昭和48年に制度化された乳児健康診査の公費負担制度を実施するため、県から委託を受けて土曜・日曜の休日を利用して市町村および保健所の協力を得て行っているが、医療施設、専門医の少ない本県においては地域住民に対する貢献度は大きい。特に離島辺地ではその度合いは大である。

健診に際しては、あらかじめ地域ごとにスケジュールを立て、医師、保健婦、看護婦、検査技師によりチームを編成し、乳児100名を1単位として、問診、診察、尿検査、血色素検査を行い、先天異常の発見を主目的とした一次的スクリーニングとしての健診を行っている。なお、昭和49年から、宮古・八重山地区については、厚生省派遣による専門医師を中心に健診班を編成し、年1回集中的に健診を行い、地域の小児保健需要に応えるべく活動をつづけている。

乳児健診の実施状況を年次的にみると、初年次の昭和48年には、実施市町村数が25で実施人数5,786であったのが、昭和49年は、実施市町村数40、実施人数13,311、昭和50年、実施市町村数41、実施人数15,090、昭和51年、実施市町村数46、実施人数17,314と、年を経るごとに、実施市町村数も、実施人数も増えており、健診のPRもさることながら、育児意識の向上も考えられよう。

乳児健診の結果、精密検査を要する乳児は昭和48年322名(5.57%)昭和49年538名(4.04%)昭和50年711名(4.71%)昭和51年741名(4.28%)で、この4年間の平均要精密検査乳児は、4.65%である。


要精密検査の乳児を異常別にみると、昭和50年は711名中、貧血277名(38.96%)先股脱および開排制限114名(16.03%)心疾患66名(9.28%)身体的発育遅延28名(3.94%)ヘルニア14名(1.97%)尿蛋白陽性10名(1.41%)の順になっており、昭和51年では、741名中、先股脱および開排制限197名(26.59%)貧血82名(11.07

(%) 心疾患79名(10.66%)身体的発育遅延63名(8.50%)尿蛋白陽性57名(7.69%)ヘルニア19名(2.56%)の順になっている。両年次とも、先股脱および開排制限、貧血、心疾患が上位を占めており、今後、本県の小児保健対策上重要な問題としてとりあげねばならないであろう。

当沖縄県小児保健協会では、乳児健診に際して乳児栄養法の調査を行っているが、生後3か月時の栄養法を昭和48年・49年の両年度についてみると、母乳栄養は各々17.3%、18.7%混合栄養は27.1%と25.9%、人工栄養は55.6%と55.3%になっており、母乳栄養が20%を割り、逆に人工栄養が半数以上を占めている。地域別にみると、母乳栄養児が沖縄本島で18.7%であるの

に対し、離島では39%とおおよそ2倍の値を示している。また出生順位別にみると出生順位とともに母乳栄養児の頻度は高くなり、母の年齢別でも高齢の母に母乳栄養児が多くみられるいる。広大な海に囲まれ、多くの離島をもち、医療施設の数的・質的な悪さに加えて、医療要員、特に専門医の少ない本県において、低出生体重児、乳児死亡、先天異常、栄養など幾多の小児児保健上の問題点が山積されている。このような状況下にあつて、本県の小児保健協会は、地域の小児保健向上を目標に遅々とした歩みではあるが、会員相互の連けいのもとに着実に進みたいと願い、努力と熱意の火をたやすまいと励みつけているのである。

郵便はがき



様

乳児一般健康診査のおしらせ

お子様の健康診査を下記の通り行ないます。
お子様の健康状態を知るための良い機会です。ぜひお受け下さい。

記

1. 健康診査の日時 昭和 年 月 日 時— 時
2. 受ける場所
3. 診査の内容 診察、血液検査、尿検査
4. 料 金 無料

※ 当日は、この裏面の問診票に記入し、母子健康手帳と一緒にお待ち下さい。【母親同伴のこと】

※ あなたの連絡先(電話 —)

図一、乳児健康診査問診票

乳児健康診査問診票

あらかじめ、このアンケートに記入し、検診日に必ずお持ち下さい。

子の名前	男 女	第 番目の子	月 令	か 月	
生年月日	昭和 年 月 日	父の年齢	満 才	母の年齢	満 才
出生した場所	自宅、 助産院、 病(医)院、				
生まれた時の体重	g 妊娠中 正常、異常 ()				
お産の時	正常、異常 () 仮死 有 無 黄疸 軽 強				
栄 養 法	1か月まで	母乳 混合 人工	離乳開始 月	現在 日 回	
	2か月まで	母乳 混合 人工	内 果汁、	うらごし、 かゆ	
	3か月まで	母乳 混合 人工	音 卵、魚、その他 ()		

現在の赤ちゃんは

- イ 健康である
- ロ 今は健康だが病気が (今までの主な病名:)
- ハ 病気である (病名:)
- ニ その他気になること ()

同じころ生まれた他の赤ちゃんに比べ発育が

- イ おくれている (首のすわり、はいはい、お座り、ひとり立ち)
- ロ おくれていない
- ハ わからない

ほかの子供に何か異常はありませんか

- イ ない
- ロ ある (兄、姉、)

主催：沖縄県小児保健協会

表1. 乳児健診実施状況

	昭和 48 年	昭和 49 年	昭和 50 年	昭和 51 年
実施市町村数	25	40	41	46
実施数	5,786	13,311	15,090	17,314
要精査数	322 (5.57%)	538 (4.04%)	711 (4.71%)	741 (4.28%)